



近松と怪奇

— 近松の作品から怪奇を拾ふ —

牧村源三

序 論 (一)

怪奇劇といふと、誰でもまづ「四谷怪談」を想ひ、「四谷怪談」といふと南北を想ふほど、南北と怪奇とは離すことの出来ぬ關聯があつて、あの膽をえぐるやうな、血みどろの殘忍と、ぞつとするほどの恐ろしい怪奇とは、南北の專賣のやうに思はれて居り。近松の作などに、そんな怪奇といふものがあるのだらうか、と思ふ人もあるかも知れないが、なか／＼どうして、随分思ひ切つた慘酷な場面や怪奇な景を、至るところに描き出してゐる。例へば「傾城吉岡染」の石川五右衛門の釜煎や、「出世景清」の牢屋などの慘劇、或ひは「平家女護島」の清盛館の清盛が火の病に苦しむ條や、「關八州繫馬」の土蜘蛛の怪異など、その他挙げればいくらでも出て来るが、これが人形だからこそ、まだしも一種の怪奇美といふやうなものが見られるものゝ、舞台の上で、俳優がかうした演技を見せれば恐らく眼をあけて見ては居られない程の、思ひ切つて慘酷な怪異が描かれてゐるものが随分たくさんあつて、南北などは到底足許へも寄りつけないと思はしめるものがある。

然し、考へて見ると、これ等は、怪奇劇を書くのが目的ではなくて、大部分

は、古澤瑠璃特有の因果物語や、地獄極樂の繪解えんかいを見るやうな靈怪な物語に當然附隨してゐる怪異か、さもなくば、景事中心の、いはば竹田からくりや糸あやつりを觀せるために、わざ／＼使つたやうな場合が多く、これが、南北などの凄味本位の幽靈狂言と違ふ點である。

一体日本の文學に怪異といふものが現はれ出したのは、いつの頃であらうか。「古事記」や「日本書記」などに見る人妖怪物は、いづれもの國が持つてゐる神話傳説的なもので、これは未だ單なる靈現とか奇蹟とかいふものに過ぎないが、欽明天皇の御時佛教が渡來し、それ以來支那の思想がどし／＼輸入されて來てから、いはゆる來世とか輪廻りんねとか、因果應報とかの妖怪意識に必要な觀念が忽ち人々の心に泌み込んだのである。

奈良朝平安朝の時代には、鬼神や物の氣きといふ形の恐ろしい怪物が盛んに人間をなやましてゐて、「日本靈異記」や「和訓栞」を見ると當時の物の氣思想がよくわかるが、「源氏物語」にある夕顔が六條御息所の怨靈になやまされるのも、この物の氣であり。後には、これが幽靈と姿を變へて、文藝の上に大いに活躍するやうになるのである。このほか「紫式部日記」や「蜻蛉日記」などにもかうした例があげられて居り、「萬葉集」にも物の氣の歌があつた筈である。

これが一轉して、いよく幽靈といふものが現はれ出したのは、「平家物語」や「宇治拾遺物語」「今昔物語」などで、續いて足利時代の謡曲——これは後の演劇といふものに深い關係を持つてゐる——に、幽靈が重要な位置を占めるに至つたのである。

今こゝで日本の怪異史を説かうとするのではないから、これはこの位にしておいて、さて本題に入るが、近松の作品も、初期時代には、當時の信仰思想や、謡曲乃至は古澤瑠璃の影響で、佛教臭味の濃厚なものや、架空的夢幻的色彩の濃い荒唐な作が多いので、それだけ怪奇趣味は全作品の隨所に横溢してゐる、しかし、それも先に書いたやうに南北式の類廢的な毒々しいものではなく、あたかも平安朝時代の物語でも讀むやうな、優雅な音楽的な、どちらかといへば女性的なものが多分に見られる。そして殊に目につくのは、女性の嫉妬を主想としたもので、例へば、「花山院はなやまのいん后ごう諍しやう」——寛文十三年正月、宇治加賀様の座で演じたもので、近松二十一歳の作と推定せられてゐる——これは花山院の女御弘徽殿と藤壺との嫉妬の争ひのことが描かれてゐるのであるが、この作に次いで「藤壺の怨靈」となつて歌舞伎狂言に脚色され——延寶五年作者二十五歳の作——三轉して「弘徽殿鶴羽たづは産家うぶや」——正徳二年、六十歳の作——となつてゐるのを見ても、作者としてはよほど得意

の作だつたのだらう。

これは作者の青年時代の環境に深い関係のある王朝古典趣味、更にいへば、王朝時代の物語や、謡曲の「源氏物」などの影響があつたため、かうした作品が生れたものと思像される。

もう一つは「赤染衛門榮花物語」——延寶八年二十八歳の作——に扱はれた、僧侶の色慾に溺れた結果の執念による化現であつて、これは女の嫉妬の執念より一步を進めたもので、人間性の本能の強さ、傳統的な教義の束縛と本能との葛藤を示して居り、後の清玄物や法界坊の狂言の先驅をなすものである。

又佛教的なものには、此の時代の作に、「いつは物語」(貞享二年作者二十三歳の作)や、「一心五戒魂」(同年)があり、これは更に翌貞享三年、義太夫と提契して新作淨瑠璃に乗り出してからも續いて、「遊君三世相」(同年、三十四歳)、「釋迦如來誕生會」(元祿八年四十三歳)「賀古教信七墓廻」(同十五年五十歳)等があり、歌舞伎狂言には、「一心二河白道」(元祿十一年四十六歳)があるが又一方に架空的、夢幻的なものが多く作られ、その中には「天智天皇」(元祿二年三十七歳)「日本西玉母」(同五年、四十歳)、「松風村雨束帯鑑」(同七年、四十二歳)「浦島年代記」(同十三年、四十八歳)等が數へられる。

その他、謡曲から取材した「佐々木大鑑」(貞享三年、三十四歳)、「源氏烏帽子折」(元祿十二年、四十七歳)「蟬丸」(同十四年、四十九歳)「天鼓」(同年頃?)「盛久」(同十五年頃?)「千載集」(同十六年頃?)「最明寺殿百人上臈」(同十六年五十一歳)、「門出會我」(同年頃?)「出世景清」(同三年、三十四歳)「本朝用文章」(同末年頃?)「十二段」(元祿三年、三十八歳)「文武五人男」(同八年四十三歳)「義經追善女舞」(同九年四十四歳)、「頼朝伊豆日記」(同十年四十五歳)「曾我五人兄弟」(同十四年、四十九歳)「大磯虎雅物語」(同十五年五十歳)等のやうな現實味の勝つた、場面の整つた作にさへも必ず一つや二つの怪異が描かれてゐるのを見ても、當時の戯曲に如何に怪異といふものが重要な要素をなしてゐるかわかるであらう。

かくて元祿十六年五月「世話物」の第一作「曾根崎心中」の發表となつて、こゝに局面の一變を見るのであるが、時代物も亦作風に一變化を來して、非常に技巧的、現實的となり、後の竹田出雲や、文耕堂、並木宗輔等の如き純技巧派の先驅をなすやうな作が多く。「雪女五枚羽子板」(寶永二年五十三歳)、「用明天皇職人鑑」(同年)「傾城反魂香」(同年)、「酒吞童子枕言葉」(同四年五十五歳)「百合若大臣野守鑑」(同七年、五十八歳)「弘徽殿鸛羽産家」

正徳二年、六十歳）、「姫山姥」(同年)等、構想も次第に大きくなり、謡曲に題材を求めた「本領曾我」(寶永三年、五十四歳)「梶狩劍本地」(同六年、五十七歳)「大織冠」(正徳三年、六十一歳)、或ひは、宗教戯曲たる「大原問答青葉笛」(寶永七年五十八歳)、「嵯峨天皇甘露雨」正徳四年、六十二歳)等も、謡曲臭味、佛教臭味を脱して、あらゆる取材が渾然と融合してゐる。しかも、そのいづれにも、やはり怪奇味が多く含まれてゐるのは、勿論、時代の好尚もあるが、舞台技巧を重んじた座主竹田出雲の注文によつて、からくり細工やあやつり仕掛を極度に應用するためには、怪異が最も適當であつたからでもあるのだらう、そして、それだけ、怪異もいよゝ技巧的になつて來たことは勿論である。

かくて近松の劃期的名作たる「國性爺合戦」(正徳五年、六十四歳)を境とする最後の十年間の晩年時代に入るのであるが、此の間には「日本振袖始」(享保三年、六十六歳)、「善光寺御堂供養」(同年?)、「平家女護島」(同四年、六十七歳)、「傾城島原娃合戦」(同年)、「井筒業平河内通」(同年六十八歳)、「變生隅田川」(同年)「日本尊吾妻鑑」(同年)、「津國女夫池」(同六年六十九歳)、「信州川中島合戦」(同年)から、最後の作「關八州繫馬」(同九年、七十二歳)に至るまで、皆それ

ゝに特徴を示してゐるが、やはり怪奇味は豊かに盛り込まれてゐる。

以上、主として時代物における「怪奇」を拾つて見たが、さて、世話物の方はどうか、一体世話物は現在の社會面記事を取扱つたものが多いので「怪奇」といふものも殆ど書きやうがなく、「卯月の潤色」の助給法師のあとおひ心中、「心中二枚繪草紙」に描かれた幻の道行、それから「長町女腹切」には珍しく力の崇りのことが書かれてゐるが、まず此の位のものであるが、これは題材が題材であるから無理からぬことである。

これで近松の初期に於ける古淨瑠璃模倣時代の稚拙な作から、後年の名篇傑作に至る迄の、怪奇の含まれてゐる諸作の外題だけをざつと列舉して見たわけであるが、次にはこれらの作品の中から、各種各様の怪奇を拾ひ出して、どんな怪奇が描かれてゐるかを調べて見やうと思ふ。

銃後にも示せ

日本の底力